研究区分	教員特別研究推進　地域振興

研　究 テーマ	図画工作科・美術科の授業における「触る行為」についての研究				
研究組織	代　表　者	所属・職名	短期大学部 こども学科・准教授	氏名	藤田　雅也
	研究分担者	所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
	発　表　者	所属・職名	短期大学部 こども学科・准教授	氏名	藤田　雅也

講演題目

図画工作科・美術科の授業における「触る行為」についての研究

研究の目的、成果及び今後の展望

【研究の目的と概要】

本研究の目的は、小学校図画工作科および中学校美術科の授業における、素材や作品に「触る行為」に着目し、手触りや温度などの感受が児童・生徒のその後の表現活動にどのような影響を与えるのかについて、理論と実践の検討を基に考察することである。COVID-19 の影響により、「触る行為」が制限される世の中になってきたが、子どもたちの日々の生活や、学校における芸術教育においては、諸感覚を通して対象と深くかかわる経験や学びが不可欠である。また、バーチャルな世界が拡散している現代においてこそ、目の前の対象に直接かかわる実体験の積み重ねは、より一層重要になってくると考える。本研究では、国内外の先行研究などの文献調査、図画工作科の教科用図書等の分析を通して、触覚を中心とした諸感覚の働きを意識した授業づくりについて検討を行った。また、小学校教諭の協力を得て、児童（小学生 215 名）を対象とした立体形状の選好と「触る行為」に関する実態調査を 2021 年 7 月に実施し、児童が触りたいと感じる形状や触り方について分析を行った。

【成果及び今後の展望】

「触る行為」については、Susan J. Lederman らによる触動作に関する先行研究や、図画工作科の教科用図書及び同指導書の内容の分析を行い、「触る行為」による感覚体験に基づいた授業づくりや題材研究について検討を行った。低学年を中心に手触りや触り心地に着目した複数の題材を確認することができた。中学校美術科の教科用図書及び同指導書の内容の分析は、次年度以降の研究において進めていきたい。

児童 215 名を対象とした調査では、6 つの異なる形状の立体物（球、円柱、円錐、四角錐、三角柱、立方体）に児童が出会う場を設定し、行為と発話を動画記録した。動画記録から 316 名の行為を個別に抽出し、触った時間、触った回数、触った順番、行為の出現などについて 6 つの形状ごとに集計を行い、形状によって促される行為の傾向について分析した。その結果、すべての学年において、「球」の形状を触る傾向が高く、発話やワークシートの分析から触りたいと感じる形状も「球」であることが分かった。また、「球」はにぎる、「円錐」・「四角錐」はつまむなど、形状によって誘発される行為は異なり、形状が触り方に影響を及ぼしていることなどが明らかとなった。

今年度は、COVID-19 の感染拡大によって、中学生を対象とした調査を実施することができなかった。また、「触る行為」や経験がその後の表現活動にどのような影響を与えるのかについて究明することはできていない。本研究の成果を基に、触覚を中心とした諸感覚の働きを意識した図画工作科・美術科の授業づくりについて、さらなる研究を深めていきたい。